

平成31年1月1日

新年ご挨拶

世界救世教

教主 岡田 陽一

皆様、新年あけましておめでとうございます。

そして、本日は、新年祭、並びに、立教記念祭おめでとうございます。

限りない愛と恵みという権威をお持ちであられる主神によって、赦され、<sup>ゆる</sup>きたものとして導かれている中で、私どもは、大いなる希望に満ちた、輝かしい年の始めを迎えることができました。

ここに、私ども一同で、主神と共におられる明主様に対し、「明主様、あけましておめでとうございます」と、新年のご挨拶をさせていただきます。

「明主様、あけましておめでとうございます」

明主様は、今から84年前、昭和10(1935)年1月1日、本教をご立教になりました。

それに先立って、昭和6(1931)年6月15日未明、明主様は、随行者28名と共に千葉県のこぎりやまの鋸山にお登りになり、黎明れいめいを破って昇る太陽に向かい、ご自身が先達せんだつとなられて、一同で「天津祝詞」を奏上いたしました。

このご参拝について、明主様は、お歌に、「雲くもいづる天津日光あまつひかげをおろが拝みて一行いっこう謹つつしみ祝詞のりとそう奏しぬ」とお詠みになっておられます。

そして、この時受けられた啓示けいじのことを、「霊界の夜昼転換の啓示」と仰せになりました。

私は、この夜昼転換の啓示は、明主様をご立教への決意を固められる上での決定的な出来事であったと思います。

それだけではなく、この啓示は、明主様のみ心の中に深く刻まれ、その後のあらゆるご神業をお進めになる上での前提となっており、数々のみ教えの中で核心をなすものと申しても過言ではありません。

啓示を受けられてから20年近くを経た、昭和25(1950)年2月4日、明主様は、世界救世(メシヤ)教創立出現の重大な意義について、「霊界における夜昼転換の時期にいよいよ入ったからである」と強調しておられます。

また、昭和26(1951)年6月15日の祭典の折にも、「昭和六年六月十五の此このよ佳ひき日ひそいといわとひら窃やかに岩戸開けぬ」というお歌をお詠みになり、改めて、この啓示の

意義を確認しておられます。

私ども全人類は、<sup>まこと</sup>真の命の親である主神を知らず、その無知のゆえに、神の願いよりも人間の願いを優先し、人間のために神を利用し、<sup>むみょうあんこく</sup>無明暗黒と言われる夜の世界の中に自らを閉じ込めておりました。

そうした私どもの罪を、主神は、その限りない愛によって赦し、今日までの心の営みにピリオドを打ち、私どもを夜の世界から解放してくださいました。

そして、私どもを大光明<sup>さんぜん</sup>燦然と輝く昼の世界に迎え入れ、私どもが自らの罪に気づき、悔い改めて、主神の赦しをお受けすることができるようにしてくださいました。

このように、夜昼転換は、主神にとって最も大切なみ業であるからこそ、私ども一人ひとりにとって、想像することさえできなかった赦しであり、恵みであり、救いでもあります。

私は、この啓示は、明主様が全人類を代表してお受けになった啓示であると思っております。

ですから、私どもも、明主様と共に、この大切な啓示をお受けしておりました、と認めさせていただく必要があるのではないのでしょうか。

明主様は、全人類に対して、この主神の大なるみ業を知らせ、その恵みに目覚めさせるために、本教をご立教になったと思います。

この明主様の強いご意志と意気込みは、ご立教当初昭和 10 年の次のようなお言葉に示されております。

「<sup>ざいしょう</sup>罪障なるものは大きな光に遇えば<sup>すみや</sup>速かに消えてゆくんであります」「太陽が出たのを知った時、<sup>あ</sup>素直に戸を開け<sup>あ</sup>放せば<sup>この</sup>此大きな光を<sup>むぞうさ</sup>無雑作に受け入れらるるのであります。然し人類は<sup>いままで</sup>今迄何千年来、眼に見える太陽の光には毎日浴しておりますが<sup>あ</sup>霊界の太陽の光に<sup>そこ</sup>遇った事が<sup>これ</sup>無い。乃で是から、戸を閉め切って電気の光以外に光というものはないと<sup>あきら</sup>諦めていた人々に、<sup>いよいよれいめい</sup>さあ愈々黎明が来たぞ、みんな速く戸を開けろと言うて世界中へ<sup>どな</sup>囁鳴って知らせる」「<sup>こ</sup>此の声を聞いて素直に、戸を開けた人が一番早く光に浴して救われるので、<sup>ちゆうちよ</sup>躊躇している人は<sup>あと</sup>後廻しになるから<sup>つま</sup>詰らないのであります」とお説きになり、また、「<sup>かな</sup>悲しい哉、<sup>み</sup>眼には<sup>しか</sup>視る事が出来<sup>なが</sup>ない、然し乍ら、時の力は、世界万民に<sup>わか</sup>判らせずにはおかない、誰が否定しようが、<sup>さえ</sup>遮ぎろうが、物質の太陽は大空高く、昇ってゆく如く、<sup>あ</sup>霊的太陽の光は日に輝きを増すのである。何と素晴らしい事ではあろう。何千年間の夜が明けると言うのだ」と明言されました。

こうした確信に満ちたお言葉に触れさせていただきますと、私は、明主様が  
“もう、長い夜は明け、新しい朝が来たのだ。早く目覚めなさい、”と一生懸命私  
どもに呼びかけてくださっていると感じざるを得ません。

私どもがどんなに深い心の闇の中にいると感じたとしても、私どもの中に、靈  
的太陽の光は必ずあるのです。

それがたとえどんなに小さな光であっても、暗闇の中に一点の光がともれば、  
そこは、もはや闇ではありません。光に満たされるはずです。

私どもは、自分の中に光がある、と少しでも思わせていただくことができれば、  
それが天国に立ち返らせていただいた、ということではないでしょうか。

私どもは、今こそ、靈的太陽の光による罪の赦しゆるをお受けし、今日までのすべ  
ての営みを、光の世界である天国に迎え入れていただき、すべてを新しいものに  
造り替えるという、主神の未来を創造する救いのみ業に、明主様を先頭にお仕え  
させていただきます。

今がその救いのみ業にお仕えさせていただける千載一遇せんざいいちぐうの時であります。

終わりに、本年も、皆様とご一緒に、明主様の指し示された全く新しい救いの  
道を歩ませていただけますことに対し、明主様と共にあるメシヤの御名にあっ  
て、主神に心からなる感謝を捧げさせていただきます。

ありがとうございました。

以 上